



Vol. 68

CONTENTS

【コラム】「読み書きそろばん」から「コンピュータ活用力+コミュカ」へ… 上田 真由美

【解説】情報システムを読み解く力の育成 (2) — ISECON2015 最優秀賞を受賞して— 田名部 元成

COLUMN

「読み書きそろばん」から
「コンピュータ活用力+コミュカ」へ

本誌の読者の皆さんには釈迦に説法であるが、今を生き抜くためには「読み書きそろばん」だけでは不十分で、コンピュータ活用力とコミュニケーション能力が必要不可欠であることを表している。では、このコンピュータ活用力とコミュニケーション能力とはどのような能力で、どこで身に付けるのだろうか。コミュニケーション能力に関しては、専門の方にお任せしたい。ここでは、コンピュータ活用力について少し考えたい。

2016年11月号のぺた語義で、情報を専門としない学部での情報科学教育の話題があった¹⁾。東京農工大学で実施された「農学系ゲノム科学人材育成プログラム」で行われたデータサイエンス教育について紹介されていた。ゲノム解析に必要なプログラミングや解析手法について学ぶプログラムとのことである。もちろん、これらはコンピュータ活用力であるが、筆者が思い描く「読み書きそろばん」と並ぶコンピュータ活用力は、もう少し基本的で、一般教養ともいえる必要最低限のコンピュータ活用力を考えている。

文部科学省が唱える「情報活用能力」には、「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の3つの要素が含まれ、多くの高等教育機関では、これらの要素を身に付けるための講義が実施されている。その内容について考えると、一般教養としてコンピュータ活用力を考えたとき、情報を正しく理解し、処理、表現する能力を含む必要がある。また、目的に合った情報モラルを考慮し、情報手段を適切に利用する能力も求められる。これらは、教科「情報」でも取り扱われている。さらに近年では幼少期からパソコンや携帯端末などさまざまな情報機器に触れる機会があり、それらを踏まえて高等教育機関では講義をする必要がある。幼少期からの利用や教育内容等により生じたコンピュータ活用力の差を埋め、先に述べたデータサイエンス教育への準備として、コンピュータ活用力を身に付けるための講義が必要と考える。

タイピング練習やオフィスソフトの演習など大学では不必要であるとの声を聞いたこともあるが、筆者の知る学生の中には、「キーボード入力よりフリック入力の方が速い」と携帯端末でデータ入力をし、レポート作成をしている学生もいる。そのような学生は一握りかもしれないが、彼・彼女らが社会に出て生き抜くためには、必要最低限のタイピングやオフィスソフトなどの使い方の講義も必要ではないだろうか。一度、各機関で実施されているコンピュータ活用力に関する講義・演習について持ち寄って、議論する場を、本会で作っていただきたい。

参考文献

- 1) 石井一夫：情報を専門としない学部・学科における情報科学教育，統計科学教育の現状と今後の展開— 2015年度優秀教育賞における取り組みを踏まえて—，情報処理，Vol.57, No.11, pp.1138-1141 (Nov. 2016).

上田真由美（流通科学大学）